
側室殿の苦悩

roon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

側室殿の苦悩

【Nコード】

N4360Z

【作者名】

roon

【あらすじ】

正妃様懐妊の報に沸き返るアトランド国の後宮。その華やかさとは裏腹に、その影に隠されし闇は濃く、周囲を密やかに覆い始める――

*『正妃様の憂鬱』、『弟君の受難』の続編となります。どちらかをご一読した方向けの作品なので、どちらかをお読み頂くか、『アトランド国設定資料集』で登場人物と用語集を一読してから読まれる事をお勧めします。

1・祝辞（N）（前書き）

あらずじにも載せましたが、ここにも載せさせて頂きます。

この作品は『正妃様の憂鬱』、『弟君の受難』の続編となります。どちらかを一読した方向けの作品なので、どちらかをお読み頂くか、『アトランド国設定資料集』で登場人物と用語集を一読してから読まれる事をお勧めします。

<追記>

この作品は主人公視点ではなく、時系列で物語が進みます。そのため、各話が繋がっていない場合もあります。

分かりにくさを少しでも解消するため、主にナディアが関係する話には（N）、主にテミスリートが関係する話は（T）、主にイオナが関係する話は（I）と題名の後ろに記述し、それによってページごとの色分けを行っています。

1・祝辞（N）

ナディアとエルディックが帰還して、一月が経過した。ナディアは時折王宮と後宮を行き来し、正妃としての役割を果たしていた。役割と言っても、まだ子をなしていないナディアにはそれほど大役が回ってくるわけではない。せいぜい、国の重役に就いている貴族の挨拶を受ける程度だ。

しかし、貴族同士の交流はなかなか骨の折れる仕事である。本心を隠しこちらを伺う者や、こちらを自分の勢力に取り込もうと弱みを探す者の中で、相手に有益な情報を掴ませないように立ち回るのは慣れていても難しい。

そんな狸の化かし合いに疲れたとき、ナディアは一通の手紙をたたためる。

「こんにちは、ナディア様」

見慣れた灰色のローブを纏い、包みを持って訪れた義弟をナディアは笑顔で迎えた。

「テミス様、お待ちしておりましたわ。さ、お座りになって」「恐れ入ります」

言われるまま、包みを侍女に頼み、テミスリートは席に着く。机の中央に用意された空の皿と茶器を見、心の中で苦笑した。

「（何てあからさまな・・・）」

ちらりとナディアに視線を向けると、侍女が包みを開き、中から取り出した菓子を空の皿に盛りつけるのを目を輝かせて見ている。テミスリートの視線に気づき、ナディアはバツが悪そうに笑った。少し頬が赤らんでいる。

「だって、楽しみだったのですもの」

「先日もお持ちしましたのに・・・」

「でも、同じものではありませんでしょう？　それに、テミス様のお菓子は絶品ですもの」

「・・・・・・ありがとうございます」

力説するナディアに、テミスリートは困ったように微笑した。

ナディアのストレス解消法の一つ。それはテミスリートとの私的な茶会である。本音と建前を使い分ける貴族の付き合いの中で、エルディックの弟であるテミスリートは自然体で接することができる数少ない人物である。それに、訪問の度に持ち込まれる菓子も、ナディアはかなり楽しみにしていた。貴族御用達の店では置かれないような素朴な菓子も珍しくて嬉しいし、それ以外の菓子も出来立てを持ってきてくれるため、とても美味しいのだ。

後宮では甘味を作る料理人は少ないし、店から取り寄せると時間が経ってしまつて味が半減するため、出来立ての菓子を楽しめるのは贅沢なことであるから何よりもありがたい。

侍女が退出し、目の前に切り分けられたレアチーズタルトをナディアは軽く断りを入れて口に運んだ。

「美味しいっ」

「ナディア様、毒見は・・・？」

「大丈夫ですわ。テミス様のお手製ですもの」

「・・・・・・」

警戒心0で幸せそうにタルトを食べているナディアを眺め、テミスリートは困ったように眉を顰めた。

信頼してくれているのはありがたいことであるが、第三者が毒を仕込む可能性は全くないわけではないのだ。疑いたくはないが、侍女が毒を仕込むこともありうるのである。侍女にそのつもりが無くとも、用意された食器に毒が塗られている可能性は無いわけではない。

「（今回は大丈夫だったけど・・・）」

一度だけ、焼き菓子の詰め合わせを持ってきた時に、その中の一つに毒を仕込まれたことがある。こっそりと回収し、事なきを得たが。

「（正妃としての責務はきちんとこなされているけど、詰めが甘いな）」

正妃になってから、あからさまに増えた嫌がらせや刺客の類のことをナディアは知らない。気づかれる前にテミスリートが対処しているためだ。

しかし、危機感だけは持っていて欲しいものである。

「（世継ぎが生まれてしまえば、大丈夫なのだけど・・・）」

実は、正妃に決まってから世継ぎが生まれるまでが最も正妃への襲撃率が高い。正式に正妃と認められても、世継ぎを生む前に亡くなれば他の正妃を立てる必要があるためだ。シェーラの際は、後宮以外の場所ではランバートが必死になって守っていたらしい。魔女の技を持っていたシェーラと違ってナディアは自分の身を守る手段

を持たないため、常時エルディックに守ってもらった方が良いのだが、エルディックは政があるため後宮までは手が回らない。そこを補うのは自分の仕事である。

「テミス様は召し上がりませんか？」

「いえ・・・頂きます」

きょとんと小首を傾げているナディアに軽く笑みを向け、テミスリートは自らの前に置かれたタルトを口に運んだ。チーズの酸味と砂糖の甘さが程よく混じり、上品な味に仕上がっている。

しかし、先程居候にしこたま食べさせられてきた身としては、少しむづかい。

「（イーノ、最近色々作るからなあ・・・）」

自分でいくつか菓子を作って味を占めたのか、ここ数日はレシピを引っ張り出して勝手に作っている。それも、一つや二つではない。その上、食べると強要してくるのである。幸い自分で食べてから勧めてくるため、生焼けであったり、黒焦げであったりといった危険物はないが、次から次へと出してこられるとても困る。成人男性といっても捌けない量だし、テミスリートの場合それより更に食べられないのだから。

テミスリートはゆっくりとフォークを下ろした。

「（食べきれるかなあ・・・）」

目の前のタルトが大きな壁に見える。

眉を下げ、タルトを眺めているテミスリートを見、ナディアは目を瞬かせた。

「どうか、されましたの？」

「……あまりお腹が空いていないもので……」

恥ずかしいのか、少し顔を赤らめ、困ったように微笑するテミスリートに、ナディアはくすりと笑いを零した。

「まだ、昼食の時間からあまり経っていませんものね。私は甘い物は別に入ってしまいますから、大丈夫ですけど」

「……そう言って頂けると助かります」

「テミス様があまり召し上がれないのでしたら、少し侍女達の分を頂いてもよろしいかしら？　きっと喜びますわ」

「是非、お願いします」

帰ればまた、菓子を持ったイーノの襲撃にあう気がする。少しでも減らして帰リたかったので、ナディアの提案はとても嬉しかった。

「テミス様のお菓子は人気ですよ」

「そう……なんですか？」

「ええ。お菓子を食わたくて私の侍女に立候補してくれた子もいるくらい」

「え……」

くすくすと笑うナディアに、テミスリートは困ったように眉を顰めた。

正妃には、専属の侍女がつけられるようになる。側室はある程度の周期で侍女が変わることになっていて、その頃に気に入った侍女がいれば正妃の一存で専属の侍女にすることが可能だ。もちろん、生家から自分の侍女を呼び寄せることも許される。ナディアは生家から呼び寄せた侍女を1人と後宮の侍女を2人専属としてつけていた。

「以前、お茶に付き合ってもらった時にテミス様に頂いたマドレーヌを出したら、とても気に入ってくれて。正妃になった途端に「側仕えにして欲しい」って言われてとても驚きましたわ」

「許可・・・されたのですか」

「ええ。とても気が利くし、同じものが好きな子なら、一緒にいても楽しいですもの」

「はぁ・・・（そんな理由で、側付き決めちゃうのか）」

当然だが、正妃付きの侍女の競争率は高い。後宮の侍女と違い、正妃付きの侍女はその待遇も地位も変わる。よほど正妃の性格に難があるわけでなければ、どの侍女も正妃付きを望む。

逆に言えば、ナディアは気に入った侍女や有能な侍女を好きに選べるということである。

別にナディアの決め方が悪いわけではないのだが、もう少し選ぶ方があるのではとテミスリートは思う。

「今は後宮に居ませんが、そのうちテミス様にも紹介しますわね」
「居ないんですか？」

テミスリートは首を傾げた。

普通、正妃付きの侍女は正妃から離れることはない。ナディアが人払いをしたため、今は部屋の中に侍女は居ないが、外で待機しているはずだ。

不思議そうな視線を向けるテミスリートに、ナディアは苦笑した。

「私に少し熱があつたみたいで、王宮にお医者様を呼びに行ってしまったの。平気だと言ったのだけれど・・・」

「そうでしたか・・・体調は、悪くないのですか？」

「ええ。言われて初めて気づきましたわ」

テミスリートはじつとナディアを見つめた。顔色が悪いということもなさそうであるし、タルトも普通に食べれている。特に異常はなさそうだ。

念のため、テミスリートはナディアの身体の中を流れる力を”見た”。

魔女の力を受け継いだため、彼は自分や他者の身体を流れる力を”見る”ことができる。身体に異常があれば、その力の流れが弱くなっていたり、力の色が濁っていたりといった変化が見られる筈だ。と、あることに気づき、テミスリートは目を瞬かせた。

「（あれ？）」

力の流れが常人とは異なっている。本来なら身体の中を巡る力がある1点に集まるように力強く流れていく。だからと言って、身体に異常があるというわけではなさそうである。

「（もしかして・・・）」

「テ、テミス様？ どうされましたの？」

急に顔を赤らめた義弟に、ナディアは目を丸くした。

「い、いえ、何でもありませんっ」

首を振って顔を両手で隠し、俯いてしまったテミスリートを、ナディアは困ったように眺める。

「・・・・・・ナディア様」

「はい？」

「・・・おめでとつございます」

顔を赤らめたまま、デミスリートはポツリと呟いた。

1・祝辞(N)(後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

2・訪問（Ⅰ）

「うむ・・・」

イオナは腕を組み、軽く息をついた。

目の前に置かれているのは、自らの家の紋章で封がされていた手紙である。その内容を頭の中で反芻し、イオナは再び息を吐いた。

「（どうするかな・・・）」

手紙はイオナの父、ビゼイルからのものだ。あからさまではないが、遠回しに後宮を辞すように促す内容のものである。

イオナが後宮に送られて既に5年が経つ。後宮を出られるという話はとても魅力的であるが、ナディアが正妃に決まってからの手紙に、何かしらの意図が働いていないとは思えない。

「（・・・王を射止められなかったから、帰って来いということなのだろう）」

後宮を辞した元側室の下へ来る縁談は、権力を欲する貴族にとってかなり魅力的なものだ。後宮に入れる時点で一定の礼儀作法含め教養は保障されるし、家柄もそれなりに良い。そして、後宮に居る間に王と関係を持てれば、後宮を辞した後も王から多少目をかけられる。これは縁談相手の出世に直接影響する場合が多い。エルディックはナディア以外と関係を持っていないため、最後の条件は満たさないにしても、それは他の側室も同じであるため、不利益にはならない。

自分を後宮から出させ、他の貴族に嫁がせたいのだろうことは明白だ。

「（騎士となれるのなら帰っても良いが、縁組のための帰還は御免被りたいものだ）」

少し窮屈ではあるが、後宮はイオナにとって居心地が良い。結婚して不自由な生活を送るくらいなら、居座るほうが楽だ。

それに、最近は違う理由もある。

しかしそれらを直に告げれば、何かしらの理由をつけて強制的に後宮から出されることになるだろう。後宮を辞すには原則として王と側室本人の意思が必要だが、王の許しがあれば家の方から呼び戻すことが不可能なわけではない。

そして、自分の父親が何としてでも自らの意思を通そうとする人物であることは、イオナ自身が良く分かっている。

「（どのように返事をすれば良いかな）」

なるべく本当の理由は隠し、父親が納得する様な内容を考えなければならぬ。返信用の便箋を眺め、イオナは軽く唸った。そんな彼女の耳に、躊躇いがちなノックの音が聞こえた。

「ん？」

先程侍女には退出するように頼んだため、部屋にはイオナ一人だ。羽ペンを置き、扉へと向かう。

「誰だ？」

「あ、あの」

聞覚えのある声が聞こえてきた途端、イオナは扉を開いた。目の前に、灰色のローブに身を包んだ小柄な人物が佇んでいる。

フードの下から覗く、ぽかんと見上げる水色の瞳と目が合った。
思わず、顔が綻ぶ。

「こ、こんにちは、イオナ様」

「・・・これは珍しい。よく来たな、テミス殿。立ち話もなんだし、まあ、入ってくれ」

「ですが・・・」

「良いから」

半ば強引にイオナはテミスリートを部屋へと招き入れた。

「そこに座っていてくれ。茶の用意をしてくるから」

「え？ わ、私も」

「一人でできる。すぐ戻ってくるから・・・帰るなよ？」

軽く釘を刺し、イオナは部屋を出た。こうでもしないと、”彼女”はすぐに自分の部屋に引っ込んで出てこなくなるのだ。会いに行けば会えるし、招待すればやってくるため、無理に留める必要もないかもしれないが、こうしてあちらから訪ねてくるのは初めてである。

給湯室へ向かう足が軽くなった気がした。

「（少しは仲良くなれたと思ってても良いのかもしれないな）」

イオナは自分が多少強引であることを自覚している。

貴族社会では、ある程度本音と建前を使いこなせなければ弱みを握られることにもなるため、殆どの場合にはあまり深い人間関係を構築することはできない。しかし、イオナは上辺だけの付き合いを嫌い、相手の真意を理解しようとする。そのため、時折強引な態度に出してしまうことがある。

そんなイオナの強引さは、貴族社会では厄介なものだ。

あまり事を荒立たせたくない貴族の令嬢にとって、他者にそれと分かる争いほど厄介なものはない。だからこそ本音を隠し、上辺だけの付き合いをする者が多いのだが、イオナの強引さはその本音を暴き出してしまうのである。そのため、そのような令嬢はイオナとは距離を置くようになる。更に、イオナは騎士を目指していたし、男性に対しては厳しいところが多々あったので、自然と適齢期で縁談を考慮する男性からも距離を置かれるようになっていた。

後宮の内外に関わらず、そのような経験の中で育ってきたイオナにとって、家の為に送られてきた他の側室とのやり取りは新鮮だった。自分の強引さを気にせず付き合ってくれる女性はかなり少なかったから。しかし、その側室達もナディアが正妃となった後すぐに後宮を辞してしまい、数人を残すのみである。

その時に、テミスリートと出会ったのだ。

出会いはあまり良いものではなかったかもしれないが、あそこまで自分に偏見を持たない”貴族の女性”にイオナは初めて出会った。そして、自分をそのまま受け入れてくれることに喜びすら覚えたのである。

そんな相手が、こうして自分に会いに部屋を訪ねて来てくれた。それを喜ばないことがあるだろうか。

顔が緩むのを抑えつつ、イオナは半ば急ぎ足で給湯室へと向かった。

湯の入ったポットを持って部屋へ戻ったイオナは、視界に入った光景に足を止めた。

テミスリートが机の上に置かれた手紙を前に、困ったように天井を向いて目を泳がせている。

「どうかしたか？」

「・・・許可なく私信に目を通すわけには参りませんので」

眉を顰め、今度は目線を机の下に向けるテミスリートに、イオナは苦笑した。

「そんなに気にしなくてもいい。見られて困る内容ではないからな」
「ですが・・・」

「分かった分かった。テミス殿は真面目だな」

確かに、私的な手紙を読むことはマナー違反だ。しかし、出したままにしておいた自分にも非はあるため、読まれていたとしても致し方ない。そうでなくとも、読まれて困るようなことは書かれていないし問題ないというのに。

イオナはポットを机に置くと、手紙を封筒に仕舞った。

「これで良いのだろうか？」

「恐れ入ります」

軽く頭を下げるテミスリートに、イオナは軽く笑った。

「では、茶にするか」

そう言っ、イオナは棚から茶器を取り出した。テミスリートが手伝おうとするのを強引に押し留め、手早くお茶の準備を進めていく。程無くして、机に二人分のお茶が用意された。

「あいにく、茶請けがなくてな。本当に茶だけになってしまっが」

「構いません。御持て成し頂けるだけでも、有難いことです」

「そうは言ってもな・・・」

菓子の類は、事前に後宮の料理人に頼んでおくか、外の店から取り寄せなければ後宮では食べられない。日持ちもあまりしないため、菓子を常備しているのはよほど生家が豊かな者だけである。

イオナも、客が来ると分かっている場合は事前に遣いを出して取り寄せておくが、流石に突然の来客には対応できない。

「（日持ちのする焼き菓子くらい常備しておけば良かったか）」

折角訪ねてきてくれたのに碌な持て成しもできないのは、何となく悲しい。イオナはため息を零した。

その様子を見て、テミスリートは目を瞬かせた。

「そういえば、イオナ様は甘い物はお好きですか？」

「まあ、好きな方だな。普段はあまり食べないが」

「でしたら、これを貰っては頂けないでしょうか？」

言葉と共に、机の上に小さな包みが乗せられる。それを解くと、中には切り分けられたレアチーズタルトが2切れちょこんと納まっていた。

「これは？」

「先程正妃様から御招待を頂きまして、手土産に持って行つたのですが、消費しきれなかったので残りを持ち帰ってきたのです」

「テミス殿が作ったのか？」

「はい」

目を丸くするイオナに、テミスリートは困ったように微笑した。

「残り物で申し訳ないのですが・・・」

「いや、頂いて良いなら頂くが。良いのか？」

後宮では菓子とは、とりわけ毒の入っていない菓子は貴重品だ。その中でも生菓子は日持ちがしないことから、滅多に食べられない。残り物だといっても、貴重なものに変わりはなかった。

しかも、目の前の”少女”のお手製である。イオナにとってはかなりのプレミアものに感じられた。

「はい。私では今日中に食べきれませんし、貰ってくださいれば幸いです」

「なら、茶請けにさせてもらおうかな。丁度2切れあることだし」
「え……」

イオナの一言に、テミスリートが固まった。イオナは不思議そうにテミスリートを見やる。

「どうした？」

「……………お腹が一杯で……」

顔を赤らめてボソボソと呟くテミスリートをしばし眺め、イオナは破顔した。

「なら、私が2つとも頂くことにしよう。生菓子は久しぶりだからな」

机の上に皿を置き、タルトを1切れ乗せると、イオナはテミスリートの方かいに座った。

「ところで、今日はどうしたのだ？」

「……私事で申し訳ないのですが、そちらをお受け取り頂ければ

と思ひまして。私では、傷む前に消費できそうになかったのです」

そう言つて、テミスリートはタルトに視線を向けた。

ナディアの茶会にワンホール持つて行つたため、ナディアとテミスリート、そして3人の侍女の分を除けても余りが出てしまつたのだ。一応、菓子を入つてくれているという侍女の分として1切れ多めに置いてきたが、それでも2切れ余つた。生菓子であるため今日中に消費しなければならぬが、部屋に自動菓子メーカーがいるテミスリートでは、今日中に消費できそうにない。というか、できない。しかし、捨てるのはかなり勿体無い。

悩みに悩んで、イオナが甘いものを嫌いでなければ引き取つてもらえないかとテミスリートは部屋を訪ねたのである。

イオナは納得した。

「（テミス殿には、それほど入りそうにないからな）」

小柄で華奢な印象の強いテミスリートが大食には流石に見えない。それに以前晚餐を共にしたときも、イオナの通常量の食事を完食できていなかった。

タルトは小さめとはいえ、1切れでかなりお腹に持つ。イオナの見立てでは、テミスリートでは1食抜いても2切れのタルトは消費できないように思えた。

「そうだったか。そういう話なら、大歓迎だ」

何せ、茶菓子付きで普段自分から来ない”少女”が訪ねてきたのである。イオナには、鴨が葱を背負つて来るよりも貴重だった。

断りを入れ、イオナはタルトをフォークで軽く切り分け、口に運んだ。少し酸味の強い、濃厚なチーズの味が口に広がった。しかし、癖が強いということはない。苺を混ぜているのか、ほんの少しだけ

苺の甘酸っぱさが後味をすっきりさせ、しつこさを和らげていた。初めての味に、一瞬言葉が出なかった。

「・・・お口に、合いませんでしたか？」

黙ってしまったイオナに、テミスリートは心細げな表情を浮かべる。イオナは慌てて言った。

「いやっ、どのように表現すれば良いか分からなかったただけだ。テミス殿は菓子作りも上手だな」

「ありがとうございます」

「・・・言っておくが、お世辞ではないからな」

軽く頭を下げるテミスリートに、思わずイオナは突っ込んだ。

この”少女”は自分を過小評価しがちなように見える。容姿についても抜きんでているし、身の回りのことが自分でこなせる時点で充分誇れる面があるとイオナは思っているのだが、本人はそう思っていないらしい。

生家の立ち位置や後ろ盾のない身であることを考えると、公的な立場は弱いかもしれないが、もう少し自信を持っても良いように思える。

「もう少し、テミス殿は自分を誇ったほうが良い。驕りは褒められたものではないが、自分を卑下することも良いことではないぞ」

「・・・はい」

曖昧に笑みを浮かべるテミスリートに、イオナはあからさまなため息をついた。

「またそのような・・・。本当に分かっているのか？」

「もちろんです」

「そうは見えないが」

憮然とした物言いに、テミスリートは苦笑した。

イオナがどのように思っているかは分からないが、テミスリートは自分を卑下しているつもりは無い。賛辞を真に受けられないようにしているだけだ。貴族達の狡猾さや抜け目の無さは身に沁みて理解しているからこそ、身分に合わせて自衛しているのである。

ついでに、皆がやらないだけで、自分の出来ることは誰でも出来ると本気で思っている。世間知らずなだけなのだ。

「少なくとも、私はそなたを誇りに思うぞ」

「？」

「私を色眼鏡で見ないだけでも、他の者とは比べ物にならないほど優れているからな」

「・・・貴族らしからぬと言う意味でしたら、納得できるのですが」

シェーラが平民（？）であり、ランバートも王族にしては貴族らしくなかったため、テミスリートも平民寄りの思考をしている。例外は、しばらくエルディックの母ミアに仕えていた乳母と貴族に育てられていたエルディックだけである。

眉間に皺を寄せるテミスリートに、イオナは口元を笑ませた。

「平民であれ貴族であれ、自分と異なる性質をありのまま受け入れることは難しい。そなたのように、即座にそういうものだと思え入れられる者は貴重だ」

イオナが後宮で再会した元同期の騎士達は、自分の身分を知った際、他の貴族にするような立ち居振る舞いで今までの態度を謝罪された。その行動は、自分から離れて行かれたようでとても寂しく感

じた。今は以前のように付き合えることが出来ているが、今も名前
で呼んでももらえないのは慣れだけでなく、貴族に対しての引け目
があるからかもしれない。

身分の差であからさまに態度を変える付き合いに長く身を置いて
いたイオナにとって、言葉遣いや立ち居振る舞いは異なるものの、
王や正妃に対しても自分に対しても、それどころか人間以外のもの
に対しても同じ姿勢を崩さないテミスリートは得がたい者だった。
テミスリートは目をぱちくりさせた。困ったように首を傾げる。

「そう・・・ですか？」

「そうなのだ」

どう答えていいか分からず、軽く視線を彷徨わせるテミスリート
の様子に笑いを噛み殺し、イオナは自分のカップに手を伸ばした。
カップの脇に除けられていた手紙が視界に映る。

手紙の内容を思い出し顔を顰めたイオナに、テミスリートは視線
を向けた。

「どうか、されましたか？」

「いや・・・」

手紙を机の端へと移動させ、イオナは深く息をついた。

「・・・父から、後宮を辞すように達しが来てな。返事を悩んでい
たんだ」

「サリヴァント伯から・・・」

テミスリートは、以前エルディックに教わった貴族の特徴を思い
起こした。

サリヴァント伯は結構な野心家で、前代から公爵家や侯爵家と婚

姻を結んでいたらしい。今代でも、イオナの姉2人は侯爵家に嫁いだと聞いている。

ということは、イオナが後宮を辞せば、他の貴族と政略結婚させられる可能性が高い。

そう考えた途端、何故か心臓が大きく跳ねた。

「……………イオナ様は、どうされたいのですか？」

動揺を押し隠し尋ねると、イオナは渋い顔をする。

「そなたなら、私の考えくらい軽く想像付くだろう」

「……………あなたの口から、聞きたいのです」

テミスリートのあまりにも真剣な眼差しに、イオナは目を瞬かせた。

「（テミス殿……………？）」

いつもの”少女”らしからぬ態度に、イオナは戸惑いを隠せない。真意を見透かそうとする瞳の奥に、他の感情が見え隠れしていた。その感情が何かまでは読み取れなかったが、強い眼差しとは裏腹に、その様子は何かに縋りつこうとする幼子のように頼りなさげに見えた。

思わず、その頭に手を置いていた。

「—— 私はここに残りたい。そなたも居ることだし、な」

イオナの返答に、テミスリートは表情を和らげた。その様子に、イオナは口元が緩むのを抑えられなかった。

「（意外に、想ってくれているのだな）」

呼び出しには応じるが、自分からは一向に接触して来ないから、そこまで好いては貰えていないと思っていたが、それは間違いだったらしい。

イオナが頭を撫でると、テミスリートは軽く俯き、少し困ったように微笑んだ。頬がほんのり赤らんでいる。その愛らしさに、イオナは更に手を動かした。

「しかし、父が煩いからな。私が帰りたくないと言っても帰らされる気がする」

「でしたら、私から王に進言致しましょうか？」

テミスリートの言葉に、イオナは手を下ろした。不思議そうにテミスリートを見やる。

「？　どういう意味だ？」

「差し出がましいとは思いますが、幸い、私は王と面識がありますから、イオナ様のお言葉を直接お伝えすることも出来ます。もし、イオナ様が後宮に留まることを望まれるのであれば、その旨をお伝え致しますが・・・」

言われて、イオナははたと気づいた。

「（そう言えば、テミス殿は現王の計らいでここに居るのだったな）」

現王エルディックとの間にどれ位強固な繋がりがあるかは分からないが、テミスリートの言い分だとほぼ受け入れて貰えるような気がする。別に正妃の位を狙っているわけではないし、むしろ手を出

されないほうが有難いので、ナディア以外に目を向けようとし
ないエルディックには受理してもらいやすいかもしれない。

王が否と言え、どんなにビゼイルが呼び戻したくとも不可能
である。

イオナは頷いた。

「頼んでも良いか？」

「はい」

「家の事情に巻き込んで済まないな」

「お気になさらず」

笑って紅茶のカップを取るテミスリートを見て、イオナはにやり
と笑った。

「しかし、気づかなかったな」

「？」

「テミス殿が、そこまでしてくれる程私を好いていてくれたとは」

「！！！！？」

真っ赤になって片手で口元を押さえるテミスリートに、イオナは
軽く噴出した。

2・訪問（Ⅰ）（後書き）

呼んでくださり、ありがとうございます。

3・疑問(N)

5日ぶりに尋ねてきたエルディックを、ナディアは笑顔で出迎えた。

「こんばんは、エルディック様」

「・・・なかなか会いに来れなくて、済まないな」

表情はほとんど変わらないものの、シヨンボリとした雰囲気が漂うエルディックに、ナディアはくすりと笑った。

「気にしていませんわ。こうして会いに来てくださいますもの」

正妃という立場に就いていたとしても、王の妃の1人でしかない公には最も優遇されるが、それが直接王の寵愛と結びつかない場合もある。事実、他国には正妃以外に寵愛した側室がいる王が存在するし、アトランドの歴史の中でもそういった王は少なからずいる。その点、エルディックの訪れが無いのは政が多忙であるからで、自分以外の側室の元に通っている訳ではない。それに、忙しくても時間があれば訪ねてきてくれる。

来ない日があるのは寂しいものの、全く気にならない。

頬を桜色に染め、嬉しそうに笑うナディアに、エルディックも目尻を下げた。

「ありがとう」

「？ 礼を申し上げる必要があるとすれば、それは私の方ですわ」

王が正妃の元に通わなければならないという謂れは無いのだ。エルディックが礼を言う必要はない。

きよとんとしたナディアに、エルディックは眉を顰めた。

「いや、私が迷惑をかけているのだから、私の方だ」

「迷惑ではありませんのに・・・」

軽く眉を顰めたナディアの髪を梳き、エルディックは慚然とした顔を向けた。

「・・・私が言いたいのだから、言わせてくれ」

喉の奥から搾り出したような声音に、ナディアは目をぱちくりさせた。言われた言葉を反芻し、さり気なく口元を隠す。そうでないと、笑ってしまいそうだった。

「（エルディック様だったら・・・）」

表情だけなら怒っていると勘違いしてしまいそうだが、一緒にいる時間が増えてきたから分かる。

これは、エルディックなりの告白だ。自分に依存していることを、甘えていることを拙い言葉で伝えようとしている。その様子が飼い主に気に入られたくて耳を下げ、こちらを伺っている大型犬のように、ナディアは必死で笑いを堪えた。

会う度に、愛しさが募る。

「・・・はい」

ふんわりと笑みを浮かべると、再びエルディックの目尻が下がった。

「――　　そう言えば」

寝台に座り、エルディックに背を預けていたナディアは、ふと思いついたように顔を上げた。黙ってナディアの髪を梳いていたエルディックは眉を顰め、ナディアを見下ろした。

「今日、テミス様に祝辞を頂きましたの」

「祝辞？　一体何のだ？」

「さあ・・・？」

ナディアは首を傾げた。

祝辞を述べられた後その理由を聞いても、テミスリートは赤い顔で「その内分かります」と言うだけで教えてくれなかった。後で分かるといっても、気にはなる。

「エルディック様は、何か心当たりはありませんの？」

テミスリートが知っていそうで自分が知らないことなら、もしかするとエルディックなら分かるかもしれない。少し期待を込めてエルディックを見上げると、渋い顔を返された。

「私に言われてもな・・・。あの子の考えは、私にも分からない時がある」

「エルディック様でも、分からないことがありますのね」

意外だった。テミスリートはエルディックのことをよく理解しているから、エルディックもテミスリートのことは分かっていると、ナディアは思っていたのだ。

ナディアが驚きに目を丸くすると、エルディックは顔を顰める。

「以前は分かったのだが、ここ数年はさっぱりだ。私に隠す事も増えたし、1人で何でも解決しようとするし、安心して1人にしておけない」

その上、魔物までついている。

エルディックは、喉までせり上がってきた言葉を無理やり押し込んだ。

余計な事を言つて、ナディアを不安にさせたくない。直接ナディアに関わることはないが、後宮に、それも良く会う人物の側に魔物がいると言われれば、とても心配するはずだ。

そんなエルディックの胸の内には気づかず、ナディアは表情を和らげた。

「そうでしたか。・・・私の弟も、十を過ぎた頃から私の傍に寄りなくなりましたの。なんでも、子ども扱いして欲しくないのですつて。テミス様もそのような時期なのですわ」

何となく気恥ずかしさを感じて、以前は言えていた事が言い出せない時期というのはある。それは、人に頼らずに自立しようとする心の表れである。ずっと傍で見えていた身としては少し寂しいが、それは成長の証として受け入れていかなければならない。

「そうなの・・・か」

エルディックのどこか寂しげな様子に、ナディアは苦笑した。

「テミス様は私よりしっかりしてらっしゃるから、大丈夫ですわ。それに、本当に困ったときはエルディック様に相談してくださいま

すでしょうし」

「そうだろうか？」

「ええ。テミス様はエルディック様が大好きですもの」

茶会でエルディックのことが話題に出ると、テミスリートは密かに微笑むのだ。本当に密かであるため見逃しそうになるが、本当に嬉しそうに微笑する様子はナディアでも見惚れてしまいそうになる。それだけでも、テミスリートがエルディックを大切に思っていることが分かる。

エルディックはナディアから視線を逸らし、軽く自分の頬を掻いた。

「（照れて・・・らっしやるのかしら？）」

よくよく見れば、ほんの少しだけ顔が赤い。

そんなエルディックの様子は新鮮で、ナディアはまじまじとエルディックの横顔を眺めた。

エルディックは視線だけをナディアに向け、目が合うと慌てて逸らす。そして、ナディア以外にも分かるほど顔を赤く染めた。

「・・・とりあえず、祝辞の理由を聞いて来る」

ギクシャクと離れようとするエルディックの服の袖を、ナディアはそつと掴んだ。

「ナ、ナディア？」

「・・・久々にいらっしやいましたのに、もう行かれますの？」

恥かしさに居た堪れないのかもしれないが、5日振りの再会なのに1泊もせずに帰られるのは悲しい。

落胆した表情を隠さないナディアを、エルディックは無意識に抱き寄せていた。

「・・・聞きに行くのは後日にしよう」

急ぐわけではないし、全身で自分が居なくなると寂しいと訴える想い人を置いていけるほど、エルディックは老成してはいなかった。

3・疑問(N)(後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

4・進言（Ｔ）

久々にナディアとの逢瀬を楽しんだ翌日の夜、エルディックはテミスリートの部屋を訪れた。

「こんばんは、兄上」

「あ、ああ」

「どうぞお入りください」

異母弟に部屋に招き入れられ、勧められるまま、エルディックは席に着いた。程なくして、ゆらりと湯気を立ち上らせるカップを目の前に置かれる。

「どうぞ」

「ああ・・・」

歯切れの悪い返事をするエルディックに、テミスリートは目を瞬かせた。

「何か？」

「いや・・・」

あまりにも普段と同じ対応に、戸惑ってしまうとは言いがたい。気分的に負い目がある分尚更だ。

更に顔を顰めるエルディックをしばし眺め、テミスリートは溜息をついた。

「ここ数日、いらっしゃれなかったことを気にしておられるのですか？ 気にせずとも良いと申し上げたはずですが」

「・・・・・・・・しかし・・・・・・・・」

前日にナディアの所でゆつくり過ごしたエルディックとしては、何となく後ろめたさがあったため、いくら気にしないと言われても感情がついていかない。

眉を顰めるエルディックを見て、テミスリートは説得を諦めた。

「・・・・冷めないうちに、お召し上がりくださいね」

心の中で溜息をつく、テミスリートは自分のカップにも茶を注ぎ、席に着いた。1人でカップを睨みつけるエルディックを余所に紅茶を堪能する。やがて、まだ顔を顰めているが顔を上げたエルディックに、テミスリートは気づかれないよう忍び笑いを漏らした。

「・・・・・・・・テミス」

「はい」

「ナディアが、お前の祝辞を気にしていたぞ。一体、何のことなんだ？」

「その内、分かりますよ」

ニコリと笑うテミスリートに、エルディックは眉を寄せた。

「・・・・理由を言わぬなら、祝辞も言わなければ良かっただろう」

「思わず、口に出してしまったのです。反省しております」

「ならば、理由を告げても良からう。良い話であれば、ナディアも喜ぶのだし」

祝辞なのだから、少なくとも良い話の筈だ。言わない理由が思いつかない。胡乱げなエルディックの視線に、テミスリートは言葉を濁した。カップを置き、エルディックから視線を逸らす。

「・・・・・・・・まだ、あまり知られたくは無いです。どこから漏れるか分かりませんから」

感情の見えない静かな目が、エルディックを射抜く。

「一月もすれば分かりますと思います。多分・・・ナディア様の方が早く気づかれると思いますので、ナディア様からお聞きください」
「・・・・・・・・分かった」

エルディックは大きく息を吐いた。

「（頑固者め）」

テミスリートなりに考えがあつてのことだろうが、一人で抱え込んでしまうのを見ているのは辛い。前は何でも相談してくれていたから余計に。

エルディックは再び紅茶を楽しむテミスリートを眺めた。

「（・・・・・・・・少し、痩せたか？）」

1週間ぶりに顔を合わせたからそう思うのかもしれないが、また少しやつれたように見える。顔色はそれ程悪くはないが、覇気が無い。単に寝起きだからだろうか。

「（侍女を付けられれば良いのだが・・・）」

テミスリートの部屋には側室付きの侍女は来ない。シェーラが部屋に施した力により、テミスリートの存在を知るものしか部屋を見ることも入ることもできないようになっていたため、気づかない

のである。あまり存在を知られない方が良いため、そのままにしているが、その分エルディックの目が届きにくい。自分が来ない限り、倒れていたとしても気づかれないう。幸い、ナディアが茶会の時の様子を伝えてくれるため、多少は安心だが、自分もナディアも暇ではない。

まめに気遣ってくれる者が欲しい。

「（あれには・・・頼みたくは無いな）」

エルディックは視線を寢室の扉に向けた。

以前紹介された、口の悪い隼姿の魔物を思い起こし、ギリと奥歯を噛みしめる。

「（・・・まさか、あれのせいで調子が悪いのか？）」

人間や魔女を糧とする魔物を傍に置いているのだ。疲れていても不思議ではない。

テミスリートは辛いことがあっても自分で何とかしようとしてしまっていることが多いため、自分に何も言わないだろうことは簡単に予想がつく。

だからと言って、手をこまねいているつもりはない。

エルディックは険しい顔をテミスリートに向けた。

「テミス」

「はい？」

「あれに何かされたら、すぐに言え。力ずくでも追い出してやる」
「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

憎憎しげに寢室に目を向けるエルディックに、テミスリートは肯定を返さざるを得なかった。

何せ、扉を壊しかねないほどの視線である。ついでにその周囲に渦巻く、徒人には見えない瘴気も濃い。

ここで異を唱えれば、怒り出すのは明白だった。

何とか関心を逸らせようと、テミスリートは寝室の扉を注視しているエルディックに慌てて声をかけた。

「あ、あのっ」

「ん？」

「兄上をお願いしたいことがあるのですが」

テミスリートの言葉に、エルディックは顔をそちらへ向けた。一瞬にして、渦巻いていた瘴気が霧散する。

普段の無表情でまじまじとテミスリートの顔を凝視すると、少し言い辛そうな、それでいて縋りたそうな様子でこちらを軽く上目遣いに見上げている。

エルディックは思わず自分の頬を抓った。

「あ、兄上？」

「（・・・・・・痛い）」

夢ではない。エルディックの目尻が軽く下がった。

以前からあまり願望を語らないテミスリートに”お願い”されることは、エルディックのみならず家族全員にとつて最も嬉しいことだった。まだ自分と家族の立場を理解していなかったテミスリートが「家族皆で一日過ごしたい」と言ったため、父ランバートは政務を一日自主的に休み、そのせいで臣下たちから大目玉を食らうという出来事もあった。そのせいで自分から”お願い”することを全くしなくなった異母弟に、エルディックは何度も「何か願いはあるか？」と尋ねたが、「もう充分」と返されて切ない思いを味わっていた。

もうほとんど諦めかけていたときに言われた、しかも、魔物にではなく、自分への”お願い”である。

「私に出来ることなら、何でも言うといい」

目に見えて上機嫌なエルディックに、テミスリートはたじたじになつた。

「え、ええと………」

「遠慮しなくていいぞ」

どう切り出してよいか悩むテミスリートを眺め、エルディックは滅多に崩さない相好を崩した。穏やかな心地で紅茶を楽しみ、次の言葉を待つ。

「……サリヴァント伯爵嬢のことなのですが」

「ふむ」

「お父君から、後宮辞退を促されたそうです」

その言葉に、エルディックは軽く眉を顰めた。

「それで？」

「彼女は辞退したくはないそうなので、兄上からサリヴァント伯に強制辞退が叶わぬよう進言しては頂けないでしょうか？」

「ふむ……」

エルディックは考え込んだ。

サリヴァント伯は野心家であるが、その娘であるイオナが正妃の位や王との関係に興味が無いことは、後宮内では知らない者はいないほど有名である。それに、ナディア経由でテミスリートと仲が良

いとも聞いている。

野心のない側室を追い出すつもりはないが、大抵そういつた側室は余所に嫁ぐために後宮辞退を望むことが殆どであるため、イオナの後宮に留まりたいと望む気持ちはエルディックには理解しがたかった。

「・・・何故、辞退を拒むのだ？」

「以前も申しましたが、彼女は男嫌いですから。後宮では兄上がナディア様一筋でいらっしゃる限りはお手つきにされる心配もありませんし、帰還して他家に嫁がされるよりは良いと考えているようです」

「・・・そうか」

エルディックとしては、ナディア以外と関係を持つ気は全くない。無事世継ぎが生まれてしまえば、事情があり帰還の適わない側室以外は全員実家へ帰還させるつもりでいる。

だから、イオナが後宮に残ったとしても全く問題ない。

「・・・分かった。サリヴァント伯にはこちらで話をつけよう」

娘を氣に入っていると暗に匂わせば、サリヴァント伯もあえて呼び戻そうとはしないだろう。それでも呼び戻そうとするなら、虚言になってしまいが関係を持ったと口裏を合わせてしまえばいい。部屋で一夜過ごせば、後は周囲が勝手に噂を撒いてくれるだろう。

エルディックは大きく頷いた。

「よろしくお願いいたします」

安堵したように表情を和らげるテミスリートに、エルディックは口の端に笑みを乗せた。

「・・・しかし、お前もなかなかやるな」

「え？」

「サリヴァント伯爵嬢を帰還させたくなかったのだろう？」

今までほとんど頼ってこなかったテミスリートが自分に進言を頼むのだから、彼にとつてそれは余程重要なことだったのだろうとエルディックは感じていた。

しかし、本人は困ったように目を瞬かせている。

「・・・否定はしませんが、彼女がそう望んでいたから叶えてあげたいと思っただけです。帰還を望んでいたら、進言しようとは思わなかったでしょう」

「・・・自覚が、ないのか？」

「？」

「サリヴァント伯爵嬢を好いているのではないのか？」

エルディックの問いに、テミスリートは軽く俯いた。

「・・・良く・・・分かりません」

「分からない？」

「帰還するかもしれないと言われた時、それを嫌だと思ったのは確かです。ですが、彼女が自分の意思で帰還を望んでいたのなら、無理に引き止めたくなかったのです。彼女には・・・自由でいて貰いたいですから」

そう言つて微笑するテミスリートにどのように声をかければいいか分からず、エルディックは空のカップに視線を落とした。

「・・・そうか」

4・進言（丁）（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

5・夢見(T)

目の前の寝台に、1人の女性が身を横たえていた。

寝台をたゆたう様に流れる、緩やかな波を描く長い藍色の髪に、水晶を思わせる透き通った水色の瞳の女性は、隣で幼けない顔を悲しみに歪ませるわが子の頬をそつと擦った。

「―― テミちゃん、そんな顔しないで。折角の美人さんが台無しよ?」

くすりと笑いを零す女性に、子は更に瞳を歪ませる。痛みを堪えるかのように俯き、床を睨みつける子の様子に軽い溜息を零し、女性の子の頭を両手で掻き抱いた。

「別にテミちゃんのせいじゃないの。ちょっと、世界が我慢出来なくなっただけ」

「・・・でも、私が母上の力を奪わなかったら」

子の荒げた声は、女性の手によって塞がれる。

「それ以上は、言っちゃダメ」

内緒話をするように自分の口の前にも指を立て、女性はふんわりと笑った。

「世界の加護を失ってもテミちゃんを産む、と決めたのは私なんだから。私が背負う責なのよ」

女性は魔女だった。世界から加護を与えられ、自然を守護する存

在。それ故に、加護を失い、役目を果たせない魔女は再び世界に呼び戻される。それは魔女としての生の終焉だ。

子を成し、魔女としての力の大半を失った女性は、世界に呼び戻されようとしていた。

黙りこんでしまった子の頭を撫でながら、女性は軽く柳眉を下げた。

「私の方こそごめんね、テミちゃんを魔女に産んであげられなくて・・・人に、産んであげられなくて」

子が魔女、もしくは徒人ならば負う必要の無い運命を課してしまったことを思い、女性は目を伏せた。子は首を振る。

「いいえ。私は、母上の子で良かったと思っています。今までも、とても幸せでした」

必死に言い募る子の様子に軽く笑い、女性も柔らかい笑みを零す。

「私もよ。・・・でも、やっぱり辛いわ」

そう言っ、女性は子をしかと抱きしめた。

「またあの時みたいなのがあっても、私は戻らなきゃいけないからテミちゃんを守ってあげられない。私に出来るのは、成人の時までもたせることだけ。それ以上は何もしてあげられない」

「それで十分です。それに、また起こるとは限りませんから」

「そうかもしれないけど・・・何かあったときに傍にいられないと分かってるのは悲しいのよ」

女性は悲しげに笑んだ。子は安心させるかのように女性に笑顔を

向ける。

「母上、私は大丈夫です。父上と母上の子どもなんですから、自己管理くらい自分で出来ます。それに、頼りになる兄上もいらっしやいますし」

「・・・そうね」

子に過保護すぎるくらい甘い義理の息子を思い浮かべ、女性は表情を和らげた。

「エル君と仲良くね」

「はい」

「バートのこと、頼むわね。すつごく寂しがりやだから」
「存じております」

真剣に頷く子に苦笑し、女性は子から手を放す。

「そろそろ、バートを呼んできてくれる？ バートとも話したいの」

「分かりました、母上」

子は一瞬瞳を歪めたが、すぐにコクリと頷いた。女性から離れ、部屋の出口へと近づく。その後姿に、女性はそつと声をかけた。

「・・・ティミちゃん」

「はい」

「前みたいに、”母様”って呼んで」

「・・・」

「あと、ティミちゃんの笑った顔が見たいな」

無邪気な願いに、子の掌が強く握られる。しばらくしてそれが解けたとき、女性の目に華のような笑みを浮かべる子の姿が映った。

「・・・では母様、また後で」

その目尻にうつすら溜まった涙に気づかれないうちに、子は部屋を退出する。

それが、女性が子の姿を見た最後だった。

「――・・・？」

視界に、見慣れた寢室の天井が映る。テミスリートは軽く目を瞬かせると、そっと寢台から身を起こした。

「（夢・・・か）」

随分と懐かしい夢だった。感慨に耽り、目尻に浮いた涙を軽く擦ると、テミスリートは寢室の窓に目をやった。

まだ夜は明けていないらしく、闇の中にランプの光がちらりと浮かんでいる。

傍らに目を遣ると、寢台の側の小机に置かれたバスケットの中、背中の羽に顔を突っ込んで眠るイーノの姿が目に入った。

その様子に苦笑を漏らし、テミスリートは再び寢台に身を横たえる。

ふと、自分の掌に違和感を感じ、テミスリートは掌を軽く握った。手が痺れたように動きが鈍い。

「（やっぱり・・・）」

最近、身体の調子がおかしい。時折思ったように身体が動かなくなったり、息苦しさを感じたりすることがある。

以前から健康とは言い難ったため、大事ではないと思っていたが、そう思い込むにはそろそろ限界があつた。

「（成人から2年・・・もった方だな）」

シェーラが心配していたことが起きようとしている。一度経験のある身だからこそ、確信を持っていた。

ふると、テミスリートの身体が震えた。

「（・・・やっぱり、少し怖いな）」

成人を迎えてからずっと覚悟していたことだ。それでも、現実には迫ってくると恐怖を覚える。それを振り払うように、テミスリートは布団を頭から被った。

「（せめてナディア様が世継ぎを産まれるまで、このままで・・・）」

叶うかも分からない望みを胸中で呟き、テミスリートは瞳を閉じた。

5・夢見（丁）（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4360z/>

側室殿の苦悩

2012年1月8日01時51分発行